

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00192

研究課題名（和文）『伊勢物語』と皇室文化の研究 近世の絵画と注釈書を中心に

研究課題名（英文）A Study of "Ise Monogatari" and Imperial Culture: Focusing on Early Modern Paintings and Commentaries

研究代表者

大口 裕子 (Oguchi, Hiroko)

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・客員研究員

研究者番号：50803780

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宮廷を中心に磨かれてきた歌学の基本の『伊勢物語』が絵画化される際のメカニズムについて、美術史と国文学の立場から考察した。美術史からはモチーフについて本文や注釈書との照合、国文学からは後水尾天皇の講釈や北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』の内容の検討などを行った。伊勢物語絵には他の文学作品や絵画からの影響があるが、注釈書から絵への反映も先学により指摘されてきた。本研究では逆に絵から注釈書への反映の可能性、すなわち双方向の影響関係を指摘した。また、分担者により、従来源氏物語絵からの影響とされてきた絵の一つは『伊勢物語』本文をもとに描かれたと考えるべきとの新たな知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、美術史と国文学の双方から『伊勢物語』を絵画化した伊勢物語絵にアプローチしたことである。鎌倉時代からの遺品がある伊勢物語絵は、時代や享受者層による画風の違いはあるが、本文にないが描かれるモチーフ、逆に本文にあるが描かれないモチーフがある。それらを美術史と国文学の観点から照射し背景を探ることで、物語がどのように享受されていたか、往時の人々の感性を窺い知ることに繋がる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the mechanism of pictorialization of "Ise Monogatari," the basis of poetry studies refined mainly at the court, from the viewpoints of art history and Japanese literature. From the viewpoint of art history, the motifs were compared with the text and commentaries, and from the viewpoint of Japanese literature, the contents of Emperor Gomizunoo's commentary and Kitamura Kigin's "Ise Monogatari Shusuisho" were examined. In addition to the influence of other literary works and pictures, it has been pointed out that the annotations are also reflected in the pictures of Ise Monogatari. In this study, the possibility of reflection from the pictures to the annotations, in other words, a bidirectional relationship of influence, was pointed out. The coinvestigator has also made a new finding that one of the paintings that have been considered to be influenced by the Tale of Genji paintings should be considered to have been painted based on the text of "Ise Monogatari".

研究分野：日本美術史

キーワード：伊勢物語 伊勢物語絵 注釈書 講釈 後水尾天皇 北村季吟

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、『伊勢物語』を絵画化した伊勢物語絵を扱う。『伊勢物語』は平安時代に成立した、時代を問わず共感を呼ぶ内容を持つ歌物語であり、近世に至るまで『古今和歌集』と並ぶ必須の教養であった。そのような伊勢物語絵について、主として注釈書との関係から考えようとしたものである。

その背景には、研究代表者（大口裕子、以下、代表者）研究分担者（青木賜鶴子、以下、分担者）も含めた美術史、国文学、建築史、服飾史を専門とするメンバーで多角的に伊勢物語絵を研究し、その成果を刊行してきたことがある。具体的には、羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇・資料篇』（角川学芸出版、2007年）、羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会編『宗達伊勢物語図色紙』（思文閣出版、2013年）があるが、特に続いて『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』（伊勢物語絵研究会編、思文閣出版、2019年）をまとめたことが大きい。この書籍は、江戸幕府の御用絵師・住吉如慶（1599～1670）筆「伊勢物語絵巻」（六巻、東京国立博物館蔵、以下「如慶本伊勢絵巻」）についての研究書である。「如慶本伊勢絵巻」は八十もの場面が細密・瀟洒に描かれた完本で、四代将軍徳川家綱の正室・高嶺院（伏見宮貞清親王第三息女顕子）の遺愛品という伝来の確かな作品で、江戸時代を代表する伊勢物語絵である。代表者は所収の論考で、如慶が後水尾天皇（1596～1680）の命で模写した「年中行事絵巻」（原本は平安時代末期成立）のモチーフや構図を複数引用した点を指摘した。すなわち、物語が絵画化される時、その図様が先行する他の絵画作品に由来するというメカニズムの一例を示した。

この「如慶本伊勢絵巻」のような皇室との関わりもある伊勢物語絵と、近世の天皇による『伊勢物語』講釈、両者の関係を検討すべく研究を始動した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、物語が絵画化される場合のメカニズムについて、江戸時代の皇室に関わる『伊勢物語』の絵と注釈に焦点を当て解明することである。江戸時代の『伊勢物語』と皇室文化に着目する理由は、皇室に関わる絵画や天皇自身による注釈書が遺るため、天皇による『伊勢物語』解釈を含む歌学が、江戸幕府に対し皇室の存在意義を示す重要な要素であったため、の二点である。

本研究は、皇室を中心に命脈を繋げてきた歌学の基本である『伊勢物語』について、美術史と国文学の双方からアプローチするのが大きな特徴である。どちらか一方のみの考察からは見えてこなかった、物語が絵画化される場合のメカニズムを浮き彫りにすること、ひいては皇室文化の一面を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、様々な伊勢物語絵、また特に天皇に関わる伊勢物語絵と注釈書の原本及びweb上での調査と分析を積み重ねる方法をとった。

主として、代表者が美術史の立場から、後水尾天皇・霊元天皇に関わる伊勢物語絵の調査、分析および関連作品の調査を行った。研究を進める過程で、関連作品として源氏物語絵や他の物語絵などにも調査の範囲を広げた。また、諸本の伊勢物語絵のモチーフに着目して、本文や注釈書との関連を分析した。分担者が国文学の立場から、『伊勢物語』の注釈書の調査、翻刻、比較分析を行った。特に、江戸時代最もポピュラーな伊勢物語注釈書である北村季吟の『初度本伊勢物語拾穂抄』の翻刻と解題は書籍として出版された。

総括として両者を照合し、注釈が絵へ、逆に絵が注釈へ反映したか否か、その背景や要因を考察した。これらの最終的な両者の照合は代表者と分担者の双方で進めた。

本研究は当初3年で行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う在外作品の熟覧調査ができなかったことなどから期間を1年延長した。

4. 研究成果

(1年目)

代表者は、美術史について、住吉如慶筆の「伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）を中心に、他の住吉派による伊勢物語絵に関し、以前に熟覧調査した画像に加え刊行物やweb公開されている画像などを援用し、場面選択や表現の比較検討を行った。さらに、日本各地に所蔵される伊勢物語絵について、大阪芸術大学教授・河田昌之氏および神戸松蔭女子学院大学教授・田中まき氏の主催になる複数の実地調査に、美術史、国文学、建築史、服飾史の研究者とともに参加し、分野を超えた意見交換をしつつ、網羅的な把握を積み重ねた。特に、近世の天皇と伊勢物語絵の関係については、高松宮家伝来禁裏本「霊元院宸画都鳥図」（国立歴史民俗博物館蔵）を熟覧調査（河田氏主催）した。

このように幅広く伊勢物語絵の情報を収集、整理した上で、伊勢物語絵をいったんモチーフに分解して、自然、人事、仕草、地名、人名等に分類して抽出し、本文とモチーフとの相関関係や各本の特徴を分析した。国文学について、まず伊勢物語の本文や成立についての基礎的な研究を再確認するとともに、注釈についての先行研究を読み込み特徴を整理した。次いで、高松宮家伝来禁裏本（国立歴史民俗博物館蔵）のうち、後水尾天皇、霊元天皇による伊勢物語の注釈書のデータでの調査、複製入手を行った。

分担者は、後水尾天皇の伊勢物語講釈の聞書について、web 公開されている画像を活用しつつ、調査と複製入手を進めた。また、未紹介の個人蔵「伊勢物語聞書」の内容調査を進めた。発表論文の中で住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を取り上げ、中世から近世初期の堂上あるいは公家における『伊勢物語』理解と絵画との関わりについて考察した。

（2年目）

代表者は、美術史について、住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）の特徴について、昨年に引き続き考察を深めた。進んだ点としては、注釈書を重点的に参照した点が挙げられる。その際に、住吉派やその源流である土佐派についても、展覧会を観覧するなど実作品の観察をもとに体系的な把握に努めた。各地の伊勢物語絵の調査も継続し、伊勢物語絵のモチーフや絵画化の多様性を分析した。加えて、伊勢物語絵以外の他の物語絵の絵画化の作例についても考察すべく、源氏物語絵について学んだ。さらに平家物語絵や曾我物語絵など大阪芸術大学教授・河田昌之氏の調査に参加した。国文学について、後水尾天皇の講釈になる「伊勢物語御講釈聞書」（早稲田大学図書館蔵）の調査および分析を行った。また、後陽成天皇、後水尾天皇など既に翻刻されている注釈書と比較しながら霊元天皇の伊勢物語注釈書を読み、並行して、霊元天皇の事績や和歌の特徴を検討した。さらに、研究分担者の青木賜鶴子氏により出版に向けて翻刻等が行われていた、江戸時代のもっともポピュラーな伊勢物語注釈書である北村季吟の『初度本伊勢物語拾穂抄』（大阪大学附属図書館蔵）について、翻刻と校正の一部を分担した。

分担者は、上記『初度本伊勢物語拾穂抄』及び版本『伊勢物語拾穂抄』（延宝八年刊）について、翻刻と校正ならびに解題の執筆を行った。

（3年目）

代表者は、美術史について、伊勢物語絵の全体的な把握を進めるべく、引き続き『伊勢物語』を主題とする関連作品を、大阪芸術大学教授・河田昌之氏主催の調査にも参加しつつ進めた。その内容は、伊勢物語の主題の多様な展開に目配りしたもので、染織の下絵、かるたなどの工芸品にまで及び、それぞれの用途における表現の特徴などを検討した。同時に、伊勢物語絵や『伊勢物語』を主題とする工芸におけるモチーフについても横断的に考察し、伊勢物語絵との関連の深い源氏物語絵や、他の絵巻などの絵画作品との比較も踏まえて研究した。絵師や工房は伊勢物語絵も源氏物語絵も遺している。そのため、さらに研究テーマの一つである住吉派の手になる源氏物語絵の作品調査も行い、伊勢物語絵との関連について考察した。国文学について、分担者の青木賜鶴子氏が翻刻、解題の執筆を行った北村季吟の『初度本伊勢物語拾穂抄』（大阪大学附属図書館蔵）について、代表者は翻刻の一部を担当していたが、当該年度に出版されるにあたり校正を重ねた。他に、歴代天皇の伊勢物語との関わりを確認するとともに、当初の予定にはなかったが、明治天皇と『伊勢物語』を主題とする文化財との関係も検討し、発表した。東国や東北の歌枕の宝庫でもある『伊勢物語』の舞台となった地を行幸した天皇は、明治天皇が初めてであるためである。

分担者は、上記『初度本伊勢物語拾穂抄』と版本『伊勢物語拾穂抄』（延宝八年刊）の解題と翻刻の校正を行った。また、香雪美術館蔵伝世尊寺行尹・行房筆になる『伊勢物語』の第四十九段の本文と、伊勢物語絵、『源氏物語』総角巻との関わりについての論文を寄稿した。さらに、『大和物語』、『拾遺和歌集』、『源氏物語』の注釈書等の古典文学を大阪との観点から論じた二本の論文が活字化された。

（4年目）

本研究の集大成として、積み重ねてきた作品調査、注釈書の検討の上に、伊勢物語絵と注釈書さらには本文との関係を総括した。

また、コロナ禍で延期した在外作品の調査のため、大阪芸術大学の河田昌之教授主催のイギリス・アイルランドでの調査に代表者・分担者も同行し、伊勢物語絵、源氏物語絵、歌仙絵などを熟覧した。具体的な伊勢物語絵は、「伊勢物語図会」（大英図書館蔵）、住吉如慶筆「伊勢物語画帖」（大英博物館蔵）、「伊勢物語絵本」（チェスター・ビーティー・ライブラリー蔵）で、既刊本の掲載写真では分かり得ない本紙の裏面や金の使用箇所も確認し、伊勢物語絵の実態の再把握に繋がった。

本研究の成果について、代表者は、河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子編『伊勢物語 造形表現集成』の編者の一人で、論考1件「モチーフからみる伊勢物語絵 その多様な背景」

コラム1件「都鳥の点描 江戸から明治へ」、作品解説4件（そのうち2件は上述の海外調査で実見）モチーフ解説全45件中41件を担当した。論考では、伊勢物語絵のモチーフを本文にないが描かれるものと本文にあるが描かれないものに大別し、先行研究に私見を交え多様な背景を考察した。特に本文に具体的に述べられないモチーフでは、従来指摘されてきた注釈から絵へという流れとは逆の、絵から注釈へという可能性を指摘した。その際に、後水尾天皇の注釈書もとりあげ、中に含まれる堂上公家の特徴的な注釈についても着目した。また、モチーフ解説では、モチーフが含まれる諸本やモチーフの描かれ方、モチーフが纏うイメージ、注釈書や他の絵画作品との関わりなどを分析して記した。

分担者は、新しく出現した香雪美術館蔵伝世尊寺行尹・行房筆『伊勢物語』の本文について翻刻、分析し、『源氏物語』本文からの影響と考えられてきた伊勢物語絵第49段は、『伊勢物語』本文をもとに描かれたと考えるべきことを指摘し、本文と絵画の関係の新たな視座を示した。また、昨年度刊行した青木賜鶴子・大口裕子著『伊勢物語古注釈大成 第七巻』の新刊紹介を行い、後水尾天皇へも献上された北村季吟『伊勢物語拾穂抄』の二種の注釈書の特徴を示すとともに、本作で完結した『伊勢物語古注釈大成』シリーズについても述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 5
2. 論文標題 「香雪美術館蔵伝世尊寺行尹・行房筆『伊勢物語』の本文について」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『香雪美術館 研究紀要』	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 5
2. 論文標題 「香雪美術館蔵伝世尊寺行尹・行房筆『伊勢物語』（翻刻）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『香雪美術館 研究紀要』	6. 最初と最後の頁 13-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 19
2. 論文標題 「和泉式部の和泉下向」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『言語文化学研究』	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/0002000669	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 127
2. 論文標題 新刊紹介「青木賜鶴子・大口裕子著『伊勢物語古注釈大成 第七巻』」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『和歌文学研究』	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 -
2. 論文標題 「香雪美術館蔵伝世尊寺行尹・行房筆『伊勢物語』の本文「琴をしふ」ということ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『伊勢物語 絵になる男の一代記』（中之島香雪美術館編図録）	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木賜鶴子	4. 巻 第30号
2. 論文標題 『伊勢物語』の解釈と挿絵 住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『百舌鳥国文』	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大口裕子
2. 発表標題 六大巡幸における天覧の文化財
3. 学会等名 明治天皇百年祭記念シンポジウム（明治神宮国際神道文化研究所主催）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 河田昌之、赤澤真理、大口裕子、伊永陽子編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 伊勢物語 造形表現集成（担当：大口裕子「図版解説」48-51頁（以下、「頁」略）の一部、104、121 コラム「都鳥の点描 江戸から明治へ」214-216 「モチーフ集」279、280・281の一部、282-288、 289の一部、290-294、295の一部、296-300、301・302の一部 論考「モチーフからみる伊勢物語絵 その 多様な背景」304-323）	

1. 著者名 片桐 洋一、山本登朗、青木賜鶴子、大口裕子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 192
3. 書名 伊勢物語古注釈大成 7 (担当: 青木賜鶴子、大口裕子「初度本伊勢物語拾穂抄」翻刻3-38頁、青木賜鶴子「伊勢物語拾穂抄 延宝八年刊」翻刻41-162頁および解題165-184頁)	

1. 著者名 大阪公立大学現代システム科学域、住友陽文、西尾純二	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 412
3. 書名 大学の大阪ガイド (担当: 青木賜鶴子「難波の葦の物語 古典文学の中の大阪」75-92頁、青木賜鶴子「萩原広道『源氏物語評釈』と近世大坂の出版」179-192頁)	

1. 著者名 Aoki Shizuko, edited by Joshua S. Mostow et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 The Netherlands , Brill	5. 総ページ数 319
3. 書名 Chapter8, "The Methodology of Late-Muromachi Ise Commentaries: Focusing on Sogi and the Sanjonishi School" in "An Ise monogatari Reader : Contexts and Receptions" pp.171-192	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 賜鶴子 (Aoki Shizuko) (60180139)	大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・教授 (24405)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------